

15. 公立施設と連携した自立促進プログラム開発事業① 事業報告書

1 事業の必要性

福岡県内において、不登校児童生徒数は減少傾向にあったが、平成25年度から増加傾向に転じている。これまでは、県の社会教育課や義務教育課で対策に取り組んできたが、予算緊縮等で県立の社会教育施設での十分な活動ができなくなっている。また、不登校の子供たちが初めて出会う同年代の人々との共同宿泊体験において、グループで社会教育施設の見学や体験活動をしたり、調理体験や自然体験をしたりすることを通して、自分の居場所を見出したり、他者の存在に感謝したりできるようにすることは重要である。本事業では不登校の中学生を対象に、たくましく、心豊かに生きていく力を培うために体験活動の場と機会を提供し、様々な体験をとおして、基本的な生活習慣の改善及び対人関係力を高めていくものである。

2 趣 旨

不登校の中学生を対象に、基本的な生活習慣の改善及び対人関係力や学力の向上等を目指して、宿泊体験を中心とした取組を継続的に行い、不登校生徒の学校復帰を支援する。また、夜須高原青少年自然の家（標高約400m）の立地条件を生かし、冬の夜須高原の魅力を生かしたプログラムを実施する。

3 事業の特色

福岡県立少年自然の家「玄海の家」はこれまで県事業として不登校の中学生を対象に事業を実施してきているが、事業の更なる充実を図るため、当施設と連携・協力し、事業の推進を図る。

- ① 福岡県立少年自然の家「玄海の家」や九州歴史資料館と連携・協力し、効果的な活動プログラム等を活用することで事業のさらなる充実を図る。
- ② 国立夜須高原青少年自然の家の立地条件（標高約400m）を生かし、冬の夜須高原の魅力を生かしたプログラムを実施する。
- ③ 学生ボランティアを活用し、子供たちの生活や活動を支援することで、人間関係づくりを促進する。
- ④ 九州歴史資料館に出向き、施設見学や職業体験をすることで、学ぶことや職業への関心を高める。

4 期間 平成28年12月7日（水）～平成28年12月9日（金） 2泊3日

5 企画・運営のポイント

事前打ち合わせを綿密に行い、中学生への直接指導や送迎の手配、物品の準備など両施設の役割分担を明確にするとともに、各活動プログラムの目的とねらいを明らかにし、共通認識する。

子供への関わり方（参加する中学生の実態や配慮すること）については職員間だけでなく、学生ボランティアとも共通認識できるように事前打ち合わせを行い、ねらいに基づいて一貫した指導・支援体制を確立する。

プログラム・日程

	6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00	23:00
7日(水)						集合 受付	活動① はじめのつどい・昼食 ・人間関係づくりゲーム ※適時休憩をはさみながら		オリエン テーション 等	活動② 調理体験 (チャレンジクッキング)		入浴 他	ハート タイム (ふり返り)	マイマイ スタディ タイム (学習時 間)	就寝準備	消灯		
8日(木)	起床	活動② 調理体験・ 弁当作り (チャレンジ クッキング)		移動 準備	活動③ サンビレッジにて人エスキー体験 昼食		バス移動 他		野山を目的地まで直線的に 歩く体験 (ストレートハイク)		移動 他	活動③ 調理体験 (チャレンジクッキング)		入浴 他	活動④ キャンドル ナイト (ふり返り)	マイマイ スタディ タイム (学習時 間)	就寝準備	消灯
9日(金)	起床	活動② 調理体験 (チャレンジ クッキング)		移動 準備	退所	バス移動		活動④ 九州歴史資料館にて 見学・職業体験・クラフト活動		昼食 ふりかえり おわりの つどい	解散							

活動の様子



ストレートハイク



キャンドルナイト



職業体験

6 成果

- 九州歴史資料館での職業体験では、発掘された土器の復元作業の仕事体験をしながら、丁寧に洗ったり、根気強く土器の接合を手伝ったりして、職業への関心を高めることができた。
- 参加者の振り返り（キャンドルナイト）の中で、友達の良かったところや、活動の中で嬉しかったことを語り合うことができた。学生ボランティアは、参加者の言葉を引き出しながら、ふり返りをコーディネートすることができた。
- 2日目のストレートハイクは、夜須高原の山の中をひたすら真っ直ぐ歩き、足場の悪いところを歩いたり、障害物を乗り越えたりする際には、班の友達同士で声を掛け合いながら協力して活動をする姿が見られ、よりよい人間関係が形成された。
- 4施設の特徴を生かしたプログラムや指導方法について情報交換をすることで、各施設の職員の資質向上につながった。

7 課題

- この事業の目的は、キャンプの成果を生かした宿泊体験プログラムの開発と実践を通して、社会教育施設における不登校復帰支援の在り方を究明するものである。参加した生徒の自尊感情・コミュニケーション能力を事前・事後で比較すると、初参加の生徒は大きく伸びている。しかし、このキャンプの経験者は数値があまり変わっていない。様々な参加者に対して効果的に不登校復帰支援を行えるよう、プログラムを検討する必要がある。